第２０回　第５分科会会議録（概要）		場　所	新宿区役所第一分庁舎 7階研修室
日　時	平成 18 年 4 月 10 日 午後 7 時 00 分～午後 9 時 40 分	記録者	【学生補助員】 渡辺・佐々木
		責任者	区事務局（松浦・池田）

会議出席者：１７名
（区民委員：１１名　学識委員：１名　区職員：５名　）

■配付資料
①第１９回会議録
②項目のまとめ（案）
③項目のまとめイメージ（案）
④新宿区史略年表
⑤区民会議中間発表会への意見・提案

■進行内容
１　はじめに
２　学識委員より
３　リーダー・サブリーダーからの報告
４　項目のまとめ、整理
５　まとめ
６　事務連絡

■会議内容
【発言者】●：区民委員、◎：学識委員、○：区職員

１　はじめに

○：　配付資料の確認（５点）
配付資料②「項目のまとめ（案）」については、後程詳しくご説明いたしますが、３月２９日と４月４日の臨時検討会での内容をまとめたものです。本日はこちらを基に話し合っていただくことになります。そして、配付資料③「提言のまとめイメージ（案）」は４月７日に第１分科会から第６分科会までのリーダーと学識委員で構成する世話人会編集部会があり、区民会議としての提言をどういう形で出していくかの案です。こちらも後程説明させていただきます。配付資料④「新宿区史略年表」は、リーダーより参考資料として情報提供がありました。最後に、配付資料⑤「区民会議中間発表会への意見・提案」は、中間発表会に来た一般の方から第５分科会

に対して寄せられた意見ですので参考までに配付します。
本日の進め方ですが、この後、廣江先生にお話いただき、次にリーダーの方から編集部会等のご報告をお願いします。その後で、項目のまとめ（案）を基づいて、第５分科会として、項目の整理をしていただきます。最後に、まとめと事務連絡を行います。では廣江先生お願いします。

２　学識委員より

◎：　具体的になってきましたので、これからの施策に繋がるような形にどう落としていくかということをやっていきたいと思います。これは私の大学の例ですが、今は大学もそれほどお金がある時代ではありません。では必要な経費をどこで賄うかということになると、お金を取ってくる先を考えなければなりません。これは産業界との連携や国の資金を獲得するなどのいろいろな方法があるのですが、私は、例えば国の資金をいただくにあたって非常に細かい企画書を立てます。企画書を立ててこういう意義があるからそれに対してお金を払うべきだと主張するのですが、その文章を作成するという作業がちょうど皆さんのやっている作業と同じような形です。もちろん立場や内容には違いはありますが、その時、何が必要かといいますと相手が納得するかどうか、つまり相手が理解して納得するような形に論議を整理していかなくてはならない。そこに最大の神経を使うわけですが、そういうことをやる上で視点を変えるとどうなるのか皆さんに是非考えていただきたい。ずっと考えてきてその意見を違う視点の方が読んだ時にどう読めるか。果たして説得力があるか。納得できるかどうかということも織り込んで、だからこれが必要なんだということまで考えていただければいいかなと思います。そこまでの作業ではただ視点を変えるだけですから、賛成の立場だったらどうか反対の立場だったらどうか、生産者だったらこうだけれど消費者だったらどうか、といったことをお考えいただけないかということです。そうすると、すごくいいものが出来てくるのでそこにご配慮いただければよいかと思います。

３　リーダー・サブリーダーからの報告

○：　事務局からこれまでの経過をお話します。３月２５日に、区民会議と地区協議会の意見交換会があり、第５分科会からはリーダーとサブリーダーに出席していただきました。第５分科会はまちづくりというテーマで第３分科会の方と一緒に、地区協議会からの参加者と意見交換しました。ここでは主にマスタープランを話題の中心として、地区協議会と区民会議が協力し合いこれからの地区行政を見守っていく必

要があるのではないかという内容でした。また、前回の分科会で、大項目、中項目について検討しましたが時間切れになり、３月２９日と４月４日に臨時検討会を開催しました。そこで作成したものが、配付資料②「項目のまとめ（案）」です。今日はこれを素材に皆様に検討していただきます。そして、４月７日に世話人会編集部会が開かれました。中間発表会の時は、特にフォーマットを決めずに各分科会が検討の経過について発表し、報告書についても合冊にしたものになりましたが、６月の提言はあくまで区民会議の提言ということで全体として考えていこうという事になりました。中項目について各分科会から出されたものを整理し、その中で大項目として括っていきます。ですから一つの大項目の中には複数の分科会の中項目が一緒に括られるということもあるわけです。中項目は分科会ごとに書くことになります。書く内容について、中項目には、将来あるべき姿、現状と課題、小項目には、取り組みの方向性や具体的な事例などです。これらのフォーマットなどの詳しいことは次回の編集部会で決定する予定です。本日、皆さんに検討していただきたいのは中項目についての整理と再確認です。全体を見直していただき、将来のあるべき姿がわかるような中項目を検討していただきたいと思います。また、４月４日に第３分科会があり、テーマは文化と歴史ということで、第５分科会からは３名が出席し、意見交換会を行いました。第３分科会はハード面が中心ですが、これからは第５分科会のソフト面との連携やお互いのアイディアを持ち寄り調整することが必要になると思います。

●：　第３分科会に参加しました。第３分科会にもアミューズメント構想いう第５分科会で話し合ったことと重なるものがありました。そこでも、産業について話し合われていました。第３分科会はハード中心なので、その意見をいただき、第５分科会の産業、観光等にも生かせる部分があるので、これに取り込んではどうかと話してきました。

４　項目のまとめ、整理

○：　中項目は具体的な小項目をまとめたものです。また、大項目は理念という大きなイメージです。本日は中項目、それぞれの小項目について検討してください。

●：　大項目については後で考えればいいと思います。中項目について提案ですが、今まで「産業、文化・観光」というくくりでまとめてきたのですが、それではお互いの関連性が無く、３つまとまっている第５分科会の意味が無いのではないかということがあり、臨時検討会で新しい中項目を立てました。

●：　中項目が少ない方が提言に向けてまとめやすいのではないかと思います。ですから中項目で例えばネットワークに関連するところが重複しているので一本化すると良いと思います。また伝統産業文化を継承する仕組みづくりと支援など小項目でもよ

いのではと考えられる部分があります。中項目のくくりの範囲を大きくすることであいまいな小項目の部分を取り込むという方法も考えられます。そのため中項目のくくりについてもう一度考え直してはいかがでしょうか。

●：　中項目の整理の必要性は感じます。中項目を丁寧に分けたことで小項目が更に細分化されているようで、これによって小項目に重複が見られてしまうといったことが起きているので中項目は整理する必要があると思います。

●：　小項目のまとめ方が不十分だと思います。自主性などについて行動を誰に求めるのかを考えなければならず、区民に求める行動などについては記述する必要がないように思います。

●：　他の分科会でも中項目中心で考えています。大項目の中の「文化を吸収し続けるまち」に吸収し発信・創造するという面を追加すると良いと思います。バスや都庁方面の開発について他分科会でも話し合っているようなのでお互いに協力するという方向で進めるのが良いと思います。提言については、今すぐにまとめていかなくてはいけないのですがこれからも変えていけるといった仕組みを残さなければいけないのではないかと思います。

◎：　「新しい才能・文化を常に吸収しつづけるまちまち」の吸収という言葉は、そういうものをもった人たちが集まるまちという意味でしょうか。

●：　吸収しつつ、受け皿としての面も欲しいということです。先程のご意見もあったように発信・創造という面も、言葉として不足しているのであれば補いましょう。

◎：　吸収という言葉が一方的に受けとめられるということですね。才能とか文化は独立してあるのではなく誰かが持っているものです。これらをもつ人が新宿区に行きたくなるようにするにはどうするかということです。吸収でも悪くないが、言葉が強すぎるので誤解される恐れがある。こういう人達が新宿で何かやろうと集まってくるまちになると、おのずと生まれてくるものがある。創造ということは、よく言われるが場合によってはなくてもいいと思う。文化創造都市というのは最近の流行でよく使われる言葉です。確かに創造するということは、必要なことですが、ここで問題とされるのは、例えば、大項目「本物へのこだわりのあるまち」では、今は本物へのこだわりを大切にしていない、だから変えていきましょう、ということになる。「新しい才能や文化を常に吸収しつづけるまち」も新宿区はそういうことを受け止めていない、才能・新しい文化を持っている人たちを呼び込めるまちにするということ。創造については中項目で書いたほうがよいでしょう。そうすることで逆に、第５分科会の特色が出ると思います。

●：　誘致サポートなどについては、勝手に流入するものを受けとめているが、異文化を尊重して積極的に受け入れるということはできていない。外国の異文化を尊重して生かしていくといったことが大切なのかなという経緯で提案しました。

◎：　文化創造は行政が使う言葉ではないと思います。行政は仕組みは作るが、創造していくのは区民たちです。以前に印象的な言葉で文化行政と文化は違うと言ったものがありました。そこを分科会で受け止めて、創造は皆さんの役割だという事を考えていかなくてはいけない訳です。

●：　編集部会で第５分科会の中項目は小項目に近いのでもう少しまとめてくれないかと言われました。大項目は茫漠としたもので小項目は非常に具体性を帯びた項目と認識していまして、そのため中項目は境界領域で非常に幅を持ったものと考えているのですが、小項目を限定することで言葉の意味合いをもっと把握できるのではないかと考えています。皆様の意見を聞いて小項目はまだ未成熟で具体的なものを出さなくてはいけないし、未整理な物も多くあります。これは短時間で作ったたたき台ですので、小項目を詰めていくことで中項目などがまとまっていくのではないかと思います。

◎：　小項目については事業計画を連想できる具体的なものですから、事業計画そのものとは少し違いますね。小項目は具体的な施策などではなくそれに繋がるものということでしょう。

●：　では、例えば、マイスター制度等は具体的な施策なのか方向なのかあいまいなところがあると思うのですが。また、事業計画まで事例として具体的にふれる必要があるのでしょうか。

◎：　マイスター制度は具体的な施策で認定制度ですね。小項目については技能の評価と認定の制度になり、具体的な施策は欄外になります。また、事業計画については、具体的にふれてもいいですし、逆にそこを想定しておかないと、区に対してこうやるべきだというものにならないので、常に頭にあるべきでしょう。だからといって、こういう制度でないといけないというところまで、詰める必要はありません。

●：　産業、文化、観光をどう連携させるかと考えて大項目を決めて、それと具体的な小項目をつなぐ形で中項目を作成しました。そのため小項目を詰めることで中項目を洗練すればよくなるのかなと思います。

◎：　小項目の欄外の具体的な施策を考えていく中で、小項目の具体的な方向を決めていく形が良いですね。インターンシップ制度があるのは優れた技能が尊重されて継承されていくためにはそれに接する場が無くてはならないといった発想ですね。インターンシップ制度そのものは小項目ではなく、どういった方法でやるかと言う欄外の事業計画です。まだまだ整理するものがあるかもしれませんね。

●：　今まで同様の会議等があったときに全然実施されなかったことがあります。今回これだけエネルギーを注いでいるのに、そうなると困るので、区民会議が終わり、長期計画が始まった後も意見が述べられたりする仕組みやシステムを組み込むといっ

た事を主張するべきだと思います。

●：　そこで区民の連携やシンクタンクの活用といった意見があります。

●：　では本物へのこだわりのあるまちから一つ一つ整理する形でよろしいですか。マイスター制度は小項目ではなく、小項目は方向性ということで技能の評価や認定制度になり、マイスター制度は、その中の具体例ということでよいですか。

◎：　マイスター制度とプロの認定はどう違うのですか。

●：　指導者的な立場の認定とプロとアマチュアの区別です。

◎：　言葉としてはプロの認定ということが優先される訳ですね。

●：　インターンシップにせよ、プロの認定にせよ、場を作るということが目的なのだと思います。プロの技能を尊重しようということが根底にあるわけです。その時に初めて後継者の問題が出てきて、それを認定しようという動きが生まれる訳です。

●：　プロの認定という括りで、事例としてマイスター制度、後継者の養成については、事例としてインターンシップ制度ということでいいですか。

◎：　本物とそれを見る者の接点をどう作っていくかという部分に関しての皆さんの気持ちを表現できると良いと思います。音楽家がもっとまちに出てきて、本物の音楽を聴いた若い人がすごいなと思う、また演劇を近くで見てすごいと感じる。そういう広がりや接点をどう作っていくか。そういった刺激をいつもどう伝えられるまちにしたいかというのが大切です。そのためにプロがどういう努力をするか、どう認定するか、区がどう関わるか、区民はどうしたいか、という事が具体的な施策として、欄外にでてくるとよいですね。

●：　マイスター制度はドイツで職人の地位を向上させる、子供たちがある年齢に達したときに、適職を見つけるもので、その話を聞いて、私はものづくりや後継者の養成、育成は大事だと思ったのです。

●：　それはとても大切です。ドイツや墨田区のマイスター制度を調べて、素晴らしいと思うなら、プロの認定の中に取り入れてもいいと思います。だが、日本語で代わりになる言葉は何か。また、具体的な中身を考えていく作業が必要です。

●：　プロの技能を評価・認定する制度が必要ということと、後継者を育成する場や、本物を見せて感じる場を作ることが将来像とって大切だと思いますので、それを小項目に入れましょう。

●：　プロと関心のある人との接点を作ること。例えば、ミニ博物館をどう発展させていくか、どういうミニ博物館にするかということも考えていける。

●：　伝統工芸などの現状を検討していきましょう。単に認定すればいいということではなくて、技能の効用を考えなければいけない。

●：　一番大事なのは、産業として生き残れるかどうかです。環境作りとは、後継者を養成する「場」ではなく「環境」が大切ということ。施設を求めているわけではない。それをもっといい言葉で表したい。新宿区は唯一芸術・文化に触れ

られる場所。

●：　今の「環境作り」を言葉にして出していただけるといい。

●：　オープンの場が欲しい、例えば、新宿のアルタを区民に解放し、企業も応援してくれて、演劇・コンサートの公開の場にしてくれるとか、施設では伝統産業を見せる場を提供してくれるとか。

●：　技能者（芸術者を含む）と人とのふれあいの場ということですか。

●：　発表の場ですね。過去の事例を挙げれば「染色文化展」がなくなってしまった。これは唯一本当にふれあいの場だったのですけれど。

◎：　まちの中にプロのすごさが転がっているようにしたい。すごさには一定の解釈が必要であり、そのためには場としかけが必要。

●：　前にもコミュニティのしかけ作りの話がありました。こだわりでやっている人たちの文化展を単独ではなくて、もっと大きなものにしたほうがいい。

●：　なにか日常的に、常にそこにあるようなものがほしい。

●：　自ら情報を作って与えていくことですよね。

◎：　ひとつの情報発信、しかけですよね。そういうものを積極的に作っていこう。では誰が作っていくのか、区民がどうやるのか、区政がどう関わっていくのかという話になりますね。

●：　行政支援を第５分科会で踏み込んでいいのか。文化的な支援は外せないが。

●：　問題は支援の視点。行政の支援というのが、産業として儲かるように支援するか、本当に育てるがきちんと作用していないのが問題。

◎：　支援は小項目の右側の欄外になりますね。中項目と小項目でどういうことを行っていくのかがあって、それを施策に結びつけた時に、事業者がやればいいという事と、事業者だけでなく、消費者もやるべき、行政が支援すべきということになる。

●：　単に後継者の育成だけでなく、技能者を誘致したり、場を新宿区が確保する、そういうイメージを入れたらどうか。小学校の廃校を何かに使うとか、そうして区民と接点を持てる場作りを意識していきたい。

●：　具体的な事例として、廃校だけではなく、遊休施設の利用をすると入れましょう。いろいろな文化のしかけが１０年後に、それこそ日本一というふうになったらいいですね。

●：　そこでは区民との出会いの場を広げる。その時に区民を啓発するしかけがないと、区民は寄ってこない。しかけを何か入れたい。

●：　次に、地域の顔の見える商店街を検討しましょう。

●：　ふれあいを大切する商業・産業ということでしょうか。その事例として、新御用聞きとは具体的には何ですか。

◎：　個別ニーズに対応するということですね。今はふれあいがないということです

か、少なくなっていることを前提で増やそう、どうすればふれあいが増えるのか、ないと何がいけないのかという認識がありますよね、それが具体的に言葉としては出てこないのですか。例えば、自動販売機が置いてあって、そこで買えばいいようになっていれば、いってしまえばふれあいなんていらないという考え方もあります。「ふれあい」と一方で「食べていかないといけない」ことをどうマッチさせるか、なぜふれあいがないのかという一定の認識が皆さんありますよね。できないことはできないのだから、商店街の考える「こうすれば、できる」というものを小項目に入れられますよね。まず、中項目でどういう商店街だったらいいのかがあって、小項目ではそれを実現するためにはどうすればいいのかということがあり、実現するための手段が欄外の具体的事例になってくる。一番大切で、実現すべき内容は、地域を含めてお客さんが買い物をしにくる商店街になるということで、そのための手段がどう小項目に出てくるかということです。それを示さないと、でも買いに行かないよね、という話で終わってしまう。皆さんも商店街に買い物に行きますか。実際はスーパーに行っているのではないですか。だったら守るべき商店街とは何かという切り口から考えるべきです。そうでないと議論が先に進まず、何の問題解決にならない。特に商店街の場合は。

●：　電気屋の例です。頼まれたときに取り替えるところまでやってくれる。そういう工夫は必要。お客が気持ちよく入ってこられる店。

●：　普段は大規模店へ行くが、配線が悪いとかがあって、すぐ直してくれるのは近所の店。値段の問題がなくなれば、私は大いに利用したい。

●：　安いことに越したことはないけど、消費者から見たときに「何であなたのお店に行くのか」が重要。

●：　商店街でもやりましょうと取り組むこと。ミニスーパーでは配達をやっていた。従来の商店街がやっていたことができなくなっているのが実状。同時に価格競争は行なわなくなっている。つまり、値段とは違うところでお客さんと関わらなければいけない。商店街ではお客さんの顔が分かる、まちを歩けば声がかかる。それをどう生かして進めていけばよいか。

◎：　ダメな理由ではなくて、どうすればいいのかを話していきましょう。頑張らなくてはいけないことを言わないと打開できない。

●：　私は「蘊蓄」という言葉を気に入っている。でもそういう商品の情報が入ってこない。私たちの時代は情報を集めたけど、今の子たちは違う。ここはこうだ、と分かるものがあるはず。蘊蓄は作ったほうがいい。このお店はこうだということを含めたことが「こだわり」になる。

●：　ひとつしかないというものはあるのですよね。それを発信するのを商店街は下手。お店側も自分の店のこだわりを見つけなければならない。

●：　商店の情報発信力は弱いですよね。とてもいいものを持っているのに、なぜ発

信しないのか。

●：　商店街単位で考えるにはもう限界。組織で考えると、横並びで突出することを嫌う。みんな平等に扱うので、特徴あるお店を出しにくくなってしまう。やる気のある、特徴あるお店をどんどんピックアップしていく必要がある。

●：　アドバイザーが必要なのではないかと思う。商店だけで考えても意味がない。しかし、区の現行のアドバイザー制度は役に立たなかった。

◎：　だからこそ、現行制度をどう変えていくかということがテーマになる。そういう制度がないという前提で作ってくれではなく、どういうことをやることが今、必要で、それに制度をどう合わせていくかという問題をここで考えていく。そのためには、行きたい店にしてくださいという事です。行きたい店といっても、分かりにくいから情報発信していく。情報発信としてはまち全体の中で商店街の面白さが分かるようなこと。お店自身にとっては面白くないと思っても、お客さんにとっては面白いことがある。そういうしかけ、仕組みを作るべき。例えば、今、秩父の鉱山跡に若者があふれていますが、どうしてだか知っていますか。そこでフィギュアの撮影をしているのです。その場所に価値を発見したのです。これは一例ですが、違った人が見たときに価値を発見していけるかをしかけていく。そういう仕組みを新宿区の事業の中で提案できるようになっていくといい。そういう異質なふれあいを新宿区の枠の中で作っていって、それが新しく変わっていくようなシステム作りをきちんとやりましょう。それが文化と産業、観光と並んでいる理由です。

５　まとめ

●：　残りの項目についても、編集部会の前１２日までに整理する必要があります。時間もないので、全員で分担しましょう。各自が案を事務局にそれぞれ送り、リーダーがそれをまとめて提出したいと思います。

６　事務連絡

＊中項目、小項目（事例）の整理、まとめ

各委員で分担して、整理する。

＊次回の分科会

・４月２５日（火）午後７時～午後９時　新宿区役所第一分庁舎７階研修室

以上